学習内容報告書 フォーマット

学校名	只見町立朝日小学校
授業者	大西　賢児

1.　単元計画

1-1.　単元名

只見の食文化

1-2.　学年

第５学年

1-3.　教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

総合的な学習の時間

1-4.　単元の概要

本単元は，只見の伝統的な食文化である「おひら」を題材として，そこに使われた食材から当時の人々の生活や思いを知ることができるものである。特に昆布の存在は海との繋がりを示唆するものであり，これを手がかりとして只見と海との関係性を学ぶことができる。また，気候的にも厳しい地域である只見の人々が，「～の幸」という呼び方でそれぞれの食材を選んでいたことから，自然に対する人々の思いも知ることができる。さらに，貴重な食材をふんだんに使用したおひらは，まさに当時の人々にとってのご馳走であり，これを饗することでのもてなしの心も感じ取ることができる貴重な単元である。

1-5.　単元設定の理由・ねらい

○　単元のねらい

・　只見の伝統的な食文化を調べることを通して，昔の人々の思いを感じ取ることができる。

・　「おひら」に使われる食材の中には海由来のものもあることから，昔から只見と海は繋がってきたことを理解することができる。

・「おひら」を題材にして，只見の伝統的な食文化を発信することができる。

○　単元設定の理由

（１）児童の実態（男子２名，女子１名，計３名）

昨年度は只見の水に着目し，只見が豊かな自然に恵まれていること，その自然は地球規模で年々侵されつつあること，自然を守るために身近なところから行動を起こしていくことの必要性があることを学んだ。この中で，地球温暖化とその影響が只見の未来に悪影響を与える可能性に気付き，それを防ぐための提案をまとめることができた。一方で，広い視野から思考を進めたこともあり，「只見」や「自分の日常」という焦点化された視点での深まりは十分ではなかった。先の提案も一般論的なもので，「只見ならでは」「只見だからこそ」という視点での着想をもたせていく必要があった。

そこで今年度は，「只見の食文化」という地域に根ざした事物から学習を進めた。「なぜ，どうして」を強く刺激したり話合い活動をコーディネートしたりすること，問いを共有することでの協働的な活動を数多く設定していくことで，より主体的な探究活動ができるようになってきた。実際におひらを作る

ことを通して，人々の思いや願いを含めた昔からの文化・伝統を強く意識できるようになった。

（２）指導観

本単元では，当時の人々の生活やおひらに代表される伝統的な食文化に込められた思いを十分に感じ取らせていきたい。さらに，昆布の存在をきっかけとして，只見と海の歴史的・文化的な繋がりについて気付かせ，山間部の只見がどのように海と繋がってきたのか，海はどのような存在だったのかを考えさせていきたい。

実際にはおひらとは何なのかという問いからスタートし，使われる食材や調理法を調べ，どのような場面で食べられてきたものかをまとめさせる。この中で，表面化していない人々の思いや願いに目を向けさせ「なぜ・どうして」と問いを連続させることで，次の活動の課題を自ら発見させ，主体的な探究活動に繋げていきたい。また，海洋交流学習において他地域の人々に紹介するという活動を通して，表現力を高めるきっかけとしていく。表面的な技術だけでなく，何を伝えたいのか，どうすればそれを伝えられるのかといった根本的な部分について十分に検討することで，今後の表現活動に大きな経験となるようにしていきたい。

本時は，個々に調べてきた内容をもとに，おひらの何を伝えるのか，おひらを通して何を伝えるのかという根本を話し合うことになる。その上で，自分達が集めた様々な情報を取捨選択して最適化し，どのような方法で発信するかまで話し合う。話合いができるようにする場の設定や話合いのコーディネートなどを通して，主体的な対話による合意形成を行わせていきたい。

1-6.　育みたい資質や能力、態度

交流校に只見の食文化を伝えるにあたり，何を伝えたいのかを明らかにしながら話合いの中でその方法や内容を考えることを通して，昔の人々の思いや願いを感じ取ることができる。

（思考力，判断力，表現力等）＜提案したり伝えたりする力＞

1-7.　単元の展開（全１５時間）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
1 2	○　只見の伝統的な文化について調べる。　(2) ・只見の伝統文化について調べる。　(1) ・只見の伝統的な食文化について調べる。　(1)	只見の歴史的事物に関心をもち，今後調べていきたい課題をもつことができる。 **〈問題を発見する力〉** ・おもしろ只見学 ・只見町史 ・インターネット
3 ～ 6	○　おひらについて調べる。　(4) ・図書やインターネットを活用して調査を進める。　(3) ・調べたことを共有する。　(1)	自分の疑問について，自分が扱える内容の範囲で情報を収集したり情報を取捨選択したりすることができる。 〈ICT スキルや情報リテラシーの向上〉

7	○　おひらについての疑問点を話合う。　(1)	おひらについて調べたことをもとに，更に深く追究するための疑問点を話合うことができる。 〈振り返りから次に学ぶべきことを探す適応的学習能力〉
8 ～ 10	○　おひらについて詳しく調べる　(3)	自分の課題について，自分が扱える内容の範囲で情報を収集したり情報を取捨選択したりすることができる。 〈ICT スキルや情報リテラシーの向上〉
11 ～ 15	○　調べたことをまとめ，発信する。　(5) ・伝えたいことを確認し，その方法や内容を話合う（本時）　(1) ・資料作成を行う。　(3) ・発信をする。　(1)	おひらについて調べたことをまとめ，発信することができる。 〈プレゼンテーション力〉 ・パワーポイントの活用

2.　学習活動の実際

2-1.　単元における位置づけ

単元　１５　時間中の　１１　時間目

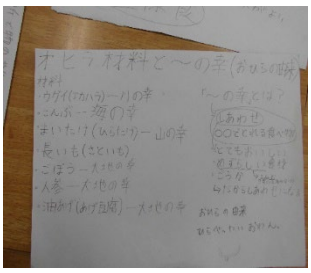
2-2.　本時の目標

交流校に只見の食文化を伝えるにあたり，何を伝えたいのかを明らかにしながら話合いの中でその方法や内容を考えることを通して，昔の人々の思いや願いを感じ取ることができる。

＜提案したり伝えたりする力＞

2-3.　本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点（方法）
1　ここまで調べたことをふり返る。 （1）　おひらについてくわしく調べたことを簡単にふり返る。 （2）　本時のめあてを確認する。 おひらを相手に分かりやすく紹介するために，どうすればよいかを話し合おう。	○　前時までに,個々が調べたことについては画用紙に簡単にまとめておき,それを確認できるようにしておく。
2　何を伝えるかを話合う。 ・　歴史的部分 ・　おひらに込められた思いや願い ・　おひらの凄さ　など	○　「伝える」という行動の根本的な部分について確認をし，話合いの中心が「何を伝えるのか」からスタートするように「紹介するにあたって，一番大事にしなければならないことは何ですか」と発問する。 ※　何を伝えるかについては,個々の思いによって違いがあって問題はないことを確認しながら,どれを最重視するかについて十分に話合う時間を確保する。全員が一致した場合には，本当にそれが一番でよいかと問い返すことで話合いを活性化させるようにする。
3　どうやって伝えるかを話合う。 ・　方法は？ ・　どの情報を使うのか？ ・　提示する順番は？など	○　安易にパワーポイントに頼るのではなく,どのような効果を狙ってなのかも考えさせる。 ※　情報の選択や順番に関しては,「伝えたいことが最もよく伝わる」という視点で考えることを伝え,自分達が出した形がそれに合致しているかを反芻させることで話合いに深みをもたせるようにする。

<table>
<tr>
<td>


４　話し合ったことをもとに，次時以降の見通しをもつ。
・　作成の分担を決める。
・　作成にあたって，意識することを伝え合う。

</td>
<td>
※　２と３の話合い活動では，前述の画用紙を用いて思考を整理しやすくするとともに，大事にしたいキーワードや相互の関連をホワイトボードに記載させることで話合いを効率化させる。ファシリテーションスキル【見える化・ライブレコーディング】の活用

○　話合いで決めた枠に従って担当を決め，スムーズに作成が始められるようにする。

◇　課題に対して提案したり伝えたりしながら，話合いに主体的に参加することができたか。
（話し合いの様子）〈提案したり伝えたりする力〉
</td>
</tr>
</table>

3.　今回の活動の自己評価

○　４年生の学びから継続し，広い視点からローカルな視点に戻して学びを進めたことにより，実感を伴った学びができた。

○　当時の人々の生活やおひらに代表される伝統的な食文化に込められた思いを十分に感じ取らせるとともに，昆布の存在をきっかけとして，只見と海の歴史的・文化的な繋がりについて気付かせ，山間部の只見がどのように海と繋がってきたのか，海はどのような存在だったのかを考えさせることができたので，郷土の文化に対する誇りや，只見愛を深めることができた。

○　海洋交流学習において他地域の人々に紹介するという活動を通して，調べることの意味を明確化したことで，子供たちの意欲を引き出し，主体性を高めることに繋がった。発表についても，表面的な技術だけでなく，何を伝えたいのか，どうすればそれを伝えられるのかといった根本的な部分について十分に検討することで，今後の表現活動に大きな経験となった。

4.　今後の課題

●　前期をおひらに向けて構成したために，昨年度行ったような只見の農業に対する取材活動等が思うように設定できず，６年生で学ぶ只見の未来についての課題意識をもたせる部分で課題が残った。

●　今回の単元構想であれば，実際におひらを作ることを体験した上で発表につなげることが最良の流れであったと考える。実際には１２月におひらを作る体験をすることができたが，やはりそのときの子供たちの感想からも，この時期に体験できていればより学びが深まったと感じるものがあった。

5.　本学習内容報告書活用にあたっての留意点

○　いかに実感を伴ったものとして児童に体験させられるかが，最終的な児童の只見愛に繋がっていく。資料が少ないので，調べ学習の段階でインタビューなどを視野に入れて多様な方法を提示したい。また，おひらを実際に作る活動は，導入時に行うことも考えられる。手間のかかるおひらを実際に作り味わうことで，なぜこのような料理が伝統料理として存在しているのかを考えるきっかけにできるからである。一方で，十分調べた後に，その思いをこめて自分で作ることで，昔の人々との思いを共有し，文化を大切に思う気持ちを高める効果が期待できる。